

2015 年度前期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—経済学部—

経済学部長 臼井英之

今回の経済学部前期授業アンケート対象科目数 39 科目のうち、アンケートが実施されたのは 35 科目であった。授業出席率に近似するであろう [延べ回答者数/延べ履修者数] の数値(約 55%)は、文芸学部や社会イノベーション学部と比べてよろしくない。

しかし〈設問 1〉「出席率」からすると、回答者の約 9 割は、出席率 80%以上の勤勉な学生なのであるから、このアンケート回答自体は正当な評価とみなしてよい。この結果を真摯に受け止めなければならない所以である。

ところで、最初の 2 つの設問は学生自身の学びの姿勢を問うている。出席率については上で述べたとおりだが、授業に取り組む姿勢を問う〈設問 2〉「授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)」は、4.09 点というほどほどの点数であった。ただ、プリントなどを配付するとそれで安心してしまうのか、ノートを「とる」どころか机の上にすら出さない学生が結構いるということをよく耳にするし、私個人も実感することがある。また〈設問 14〉「予習または復習をよくした」はもっとも点数が悪く 3.00 点である。この点については「予習・復習」の促進というより、むしろ授業準備の成果を問う授業、とか、授業の主要内容の振り返りを授業時間内に組み込んでしまうとかいった授業の工夫、あるいは 1 週あたりの履修授業数を思い切って減らす、などといった対応も射程に入れてよいのかもしれない。4 年生を除くと週 11~12 コマの授業を選択する学生がほとんどであろうが(1 日あたり平均 2.5 コマ履修)、この場合、当日内で履修科目すべてにわたって、予習復習に取り組むというのは至難のわざなのだから。

授業への全般的評価を示す〈設問 12〉「総合的にこの授業を評価できる」は 4.12 点とそれなりの評価と思われるが、教員への重い問いかけとなるのは〈設問 11〉「この分野の関心と学力が得られた」の点数(3.97 点)と相関係数(0.59)であろう。〈設問 9〉「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」(3.63 点、相関係数 0.67)もまた、学びの魅力に迫るような実践をしているのか、という教員への問いかけでもある。われわれ教員が、この種の参加型、あるいは対面・双方向型の授業、広くはアクティブラーニングと称される授業を多面的に展開することで、学生の授業に対する充実感・満足感も上昇し、〈設問 11〉の評価も変わってくるであろうし、それに応じて〈設問 6〉「この授業のレベルは、あなたに適切であった」(3.67 点)という評価も違ってくると思われる。

教員の教育への取り組み姿勢は概ね 4 点以上の評価を得ているのだから、あとは学生の学ぶ意欲を引き出し、学生みずからが学べる仕掛けを、われわれ教員がどうつくり上げていくかということになるのではなかろうか。